

三多摩で50年、地固めと変革

関西都紙工は、来年7月に創業50周年を迎えるボックスメーカー。創業時から現在地に根を下ろし、段ボールを通じて地域の発展に貢献してきた。顧客に根を下ろし、段ボールを通じて地域の発展に貢献してきた。顧客に根を下ろし、段ボールを通じて地域の発展に貢献してきた。



中央の原茂社長と田中取締役(右)、筒井営業部長

の移転だった。原茂亭弘社長は「非常に大きな衝撃」と振り返る。「A式ケースが大半で、品質面への要求は必ずしも高くはなかったが、これを機に、前向きに、品質や付加価値製品などの差別化にも力を入れるようになった」という。

その一環として、昨年10月に押谷製作所のフォルターグループを導入。田中取締役兼統括部長は「品質、生産性、作業性などあらゆる面」に大きく貢献している。営業での大きな武器にもなっている。今夏導入予定の業務ソフトも作業の効率化に役立ち、人材の有効利用に役立ってくれるだろう」と強調した。

筒井専也営業部長は「地道なシステム化を注いでおり、仕事をしたい。少なくとも三多摩地区では、提案や設計でもオールラウンドで勝てるようになりたい」と語る。

自社の強みについて「製造スタッフは全員10年以上のベテラン。昔から社員教育には力を注いでおり、仕事を力の斬新な発想の融合によるアイデアの活性化にも取り組んでいる」と(同)。

企業訪問

No. 300

(株)西都紙工
東京都昭島市

●創業 1967年 ●所在地 東京都昭島市中神町1-12-16 ●従業員 20名 ●沿革 1967年7月原茂洋治初代社長が(株)西都紙工を創業、71年(株)西都紙工に改組、88年工場新設、2007年原茂亭弘社長が就任

今年2月に初出展した「たま工業交流展」では、土台となる箱の上と同サイズのシートを必要の高さだけ積み、その上にさらに箱(上蓋)を被せるだけのアイデア椅子や、段ボールパレットなどを出品した。「多くの地元企業からアドバイスもいただき、大きな反響があり、手応えを感じている」と(同)。

出展のキッカケは、好評だった段ボール展示を市役所に展示したこと。原茂社長は地元出身で、長年の交友関係から各方面に顔が広いため、以前から様々な話はあったという。「江戸時代から17代。昔より昭島に住み、地元を愛している。本当は徳味の川柳やサイクリングで有名になりました。

よって、余裕ができた製造や経理等のスタッフを営業に回し、主要顧客の抜けた穴を埋めるために新規開拓に力を入れ実績を上げている。弊社の近隣には組合が少ないはずだが、わざわざ遠方のメーカーへケースを発送しているユーザーも多くいるようになったので、そこに焦点を当て活動してい

熟知しているため納期対応には自信がある。住宅街の中にあるため、夜間は機械を回さないなどのプレッシャー、程良い緊張感もメリハリの効いた迅速な対応につながっている(田中取締役)とする。近年は、続けて営業および事務スタッフを採用しており「ベテランスタッフと新職

れい」でも好評だった(筒井営業部長)。

現在は「外資を断絶する組み立て式段ボール箱」を開発中。東京都の補助金を受け、組み方や塗料など試行錯誤を重ねている。今後は、展示会等のイベントにも積極的に参加し、自社製品のPRとともに情報収集にも力

いですね」と笑顔で話す。

先日昭島の名物「深層地下水」を紹介する小冊子でも同社が取り上げられた。料理や菓子、花屋、繊維メーカーなどの地元の優良企業とともに、段ボールで地元貢献する企業として紹介された。

今後は「展示会や冊子も一つの手段だが、三多摩の歴史・文化を紹介しつつ、物流・家具・建築資材など幅広い分野での、独自の製品開発にも力を入れ、一味違った段ボール業者が昭島にあることを知っていただきたい。多摩で愛され50年、をキャッチフレーズに、地元の知名度を充分に活用し、地に足のついた堅実な会社を目指したい」と原茂氏を語っていた。

写真①工場外観②押谷製フォルターグループ

